

カキ果実に対するカキクダアザミウマの加害時期と防除対策

(1) 加 害 時 期

才田 英雄・津留 嘉成・篠倉 正住・山田 健一¹⁾・堤 隆文²⁾
(福岡県病害虫防除所・¹⁾福岡県農業総合試験場)

Injurious period and control of *Ponticulothrips diospyrosi* HAGA et OKAJIMA on the fruit of Japanese persimmon. (1) Injurious period. Hideo SAITA, Yoshinari TSURU, Masazumi SHINOKURA, ¹⁾ Ken-ichi YAMADA and ²⁾ Takafumi TSUTSUMI (Fukuoka Plant Protection Office, Chikushino, Fukuoka 818. ¹⁾ Fukuoka Agricultural Research Center, Chikushino, Fukuoka 818)

カキクダアザミウマ (*Ponticulothrips diospyrosi* HAGA et OKAJIMA) は、本邦では1975年に岡山県で初めて発見されたが(逸見, 1979)、福岡県においても1984年に久留米市及び粕屋郡久山町で初発生を確認し(山田, 1984)、1988年には県内のカキ栽培地帯のほぼ全域で認められるようになった。本虫はカキの葉と果実に大きな被害を与えるが、実害が大きいのは果実における被害である。果実の被害は、葉での被害が全くみられないほ場でも発生しており、加害時期について不明な点が多い。そこで著者らは、カキクダアザミウマのカキ果実に対する加害時期と防除対策について試験を行い、若干の知見が得られた。本報では果実に対する加害時期について報告する。

材料および方法

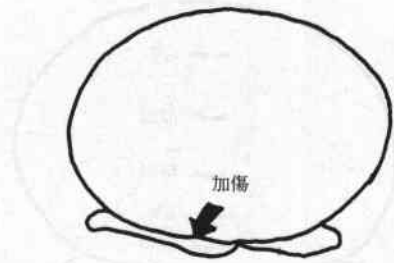
1. 被害痕の発生時期

筑紫野市吉木にある福岡県農総試験場内ほ場の松本早生富有、西村早生、伊豆各5年生を供試した。供試樹から任意に225果をマークし、1989年6月7日～8月3日に4～10日間隔でそれぞれの果実について被害痕の発生状況を調査した。なお、供試樹は殺虫剤無散布とした。

2. 果実への加傷による加害時期の推定

収穫果におけるカキクダアザミウマの被害痕の位置から本虫の加害時期を推定するため、時期ごとに果実に傷を加え、収穫時の傷の位置を調査した。試験は筑紫野市吉木にある福岡県農総試験場内の松本早生富有3樹から任意に50果を選び、ヘタと果実の接している部分4カ所を、第1図のように針で傷をつけた。加傷処理は同一果実に対し1989年6月7日、6月19日、6月28日、7月8日、7月19日の5回行った。

調査は10月26日に収穫したそれぞれの果実について、果梗部から果頂部までの距離をA、果梗部から傷までの距離をBとし、 $100B/A$ により傷の位置を表した。



第1図 加傷位置

3. 果実上における被害痕からの加害時期の推定

福岡県農業総合試験場(筑紫野市)の場内、および甘木市、浮羽郡吉井町の各ほ場からカキクダアザミウマの被害果を収穫し、それぞれの被害痕を前記2の方法で調査した。果実の収穫は、農総試では11月15日、甘木市では11月16日、吉井町では11月13日に行った。なお、各ほ場ともカキクダアザミウマによる巻葉は認めていない。

結 果

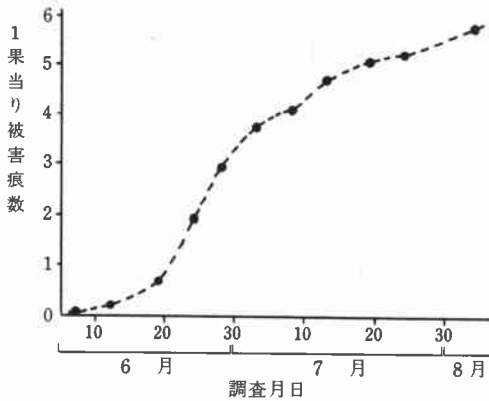
1. 被害痕の発生時期

8月3日までに被害痕の現れた48果について1果当りの被害痕の発生状況を調査した。その結果、被害痕の発生は6月上中旬から8月上旬まで認められ、特に6月下旬から7月上旬にかけて急増した(第2図)。

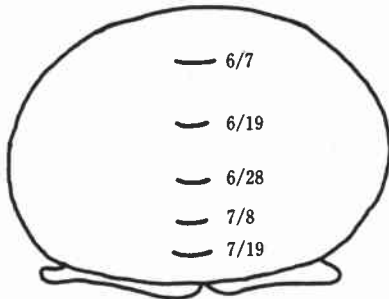
2. 加傷による加害時期の推定

時期別にヘタと果実の接している部分へ針を用いて傷を加えたところ、その傷の位置は、収穫期のカキ果面上には第3図のように現れた。その傷の位置を果実の果梗部を0、果頂部を100として表わすと、加害時期が早いほど値が大きくなり、果頂部により近い位置に傷が現れることが明らかになった(第4図)。

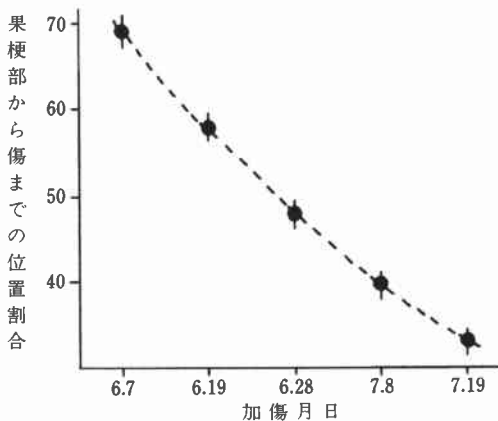
3. 果実上における被害痕からの加害時期の推定



第2図 カキクダアザミウマ被害痕の発生時期



第3図 収穫時の傷の位置



第4図 加傷時期別位置割合。各点は50果の平均値を、縦線は標準偏差を表す。

前記2の調査結果をもとに加害時期の推定を行った(第5図)。その結果、本虫による巻葉がみられないほ場における被害痕の発生は、6月上旬から7月中旬以降まで認められた。その中でも6月下旬から7月上旬に加害されたと推定される被害痕が最も多かったが、7月中旬以降に加害されたと推定される被害痕も全体の10~

加害推定時期	農総試験場ほ場 (%)				甘木市現地ほ場 (%)				吉井町現地ほ場 (%)			
	10	20	30	40	10	20	30	40	10	20	30	40
6月7日以前	[Bar]				[Bar]				[Bar]			
6月7日~19日	[Bar]				[Bar]				[Bar]			
6月19日~28日	[Bar]				[Bar]				[Bar]			
6月28日~7月8日	[Bar]				[Bar]				[Bar]			
7月8日~19日	[Bar]				[Bar]				[Bar]			
7月19日以降	[Bar]				[Bar]				[Bar]			

第5図 カキクダアザミウマ被害痕の発生時期別割合

20%あった。

考 察

時期別にヘタと果実の接している部分へ針を用いて傷を加え、その傷の位置をもとに加害時期の推定を行った。その結果、本虫による巻葉がみられないほ場における1989年の加害時期は、6月上旬から7月中旬以降まで長期にわたっており、その中でも6月下旬から7月上旬の加害が多かったものと推察された。

また、殺虫剤無散布ほ場における被害痕も、6月上旬から8月上旬まで発生しており、中でも6月下旬から7月上旬にかけての被害が多く、前述の結果と一致している。

以上のことから、果実における被害痕の位置を求めることにより、カキクダアザミウマの加害時期を推定することが可能と考えられる。

逸見・橋本(1984)によるとカキクダアザミウマの第1世代成虫は、6月中下旬からカキヤアカマツ等の粗皮間隙に移動して潜伏するとされているが、1989年の調査では、7月中旬以降まで加害が認められ、今迄の調査結果と異なっている。

小松(1987)、逸見・橋本(1984)は、巻葉がほとんど認められなくても、果実の被害が発生すると報告しており、今回の調査でも果実の被害は、園内に巻葉が全く認められないほ場で発生していることから、第1世代成虫の活動はかなり広範囲に及んでいることが推察される。今後、本虫の加害が長期間に及んだ要因やこのような場合の防除対策について検討を要する。

引 用 文 献

1) 小松季生(1987) 今月の農業 31(4): 267-271. 2) 逸見尚(1979) 植物防疫 33: 231-235. 3) 逸見尚・橋本修二(1984) 植物防疫 38: 312-315. 4) 山田健一(1987) 福岡県農業総合試験場研究報告 B-6: 39-44.

(1990年5月1日 受領)